

る面が多く公表をはばかる性格の資料や調査結果が多く、公表されている結果は少ない。しかし大学の中で入試問題がなおざりにされているわけではない。むしろ本務の研究テーマを抱えながら、入試の問題に多くの時間を割いている

研究者も少なくない。動向の内容は研究成果の一端を定性的に紹介したに過ぎないが、この奥には関係者のたゆまざる努力が蓄積されていることを賢察いただければ幸いである。

共通第1次学力試験と第2次試験

共通第1次学力試験、第2次試験に関しては、試験問題の統計的分析(GP分析等)、各種科目試験の得点分布及び同時分布の分析、入試成績以外の度数との関係の分析、総合成績のための配点、自己採点の誤差などの分析が行われている。

入学試験は本来入学希望者が入学後の学習に必要なとする学力を備えているかどうかを確認するのが主な目的である。しかし、現実には競争試験と化し、学力の個人差の識別を主たる役割とするようになってきている。いずれにしてもそれら目的にふさわしい内容や困難度の問題が用いられなければならない。共通第1次学力試験の各問題項目が、各大学の側からみて適しているかどうかは、自大学で準備した第2次試験の問題と同様、常に確認しておく必要がある。本報告をみる限り、各大学の第2次試験などに関連して第1次試験の問題項目を検討したという報告がほとんど見当たらない。これは、各大学がこのようなことを行っていないのでは必ずしもなく、報告されないのかも知れないが、もっと情報の交流があってもよさそうである。

学力・能力の個人差の測定という観点からす

ると、各入試科目の得点分布は基本的な情報である。これについては、ほとんどの大学が何らかの形で報告している。

いくつかの大学では、共通第1次学力試験の全国の得点分布に対し、当該大学の分布の位置を確認したり、受験者と入学者の得点分布を比較したりしている。しかし、そこから何を読み取るかについては、明確な説明があまりない。

入試に利用される各種成績の間の相関係数についての報告は極めて多い。各種成績別の得点分布と同様、成績間の同時分布も基礎的資料として役立つが、報告の便宜もあって相関係数に要約されることが多い。各科目間の相関係数は、限定された制約の中ではあるが、各科目の学力測定の特徴を反映し、細かにみていくといろいろと示唆を得る。ある大学の場合、共通第1次学力試験の物理と数学の間の相関係数の方が、第1次試験と第2次試験の同じ科目物理同士の間相関係数より高いことが観察される。相関係数の標本分布などを考えれば、わずかな数値の違いをとり立てるのは無意味だが、少なくとも同じ科目の相関が、異なった科目間の相関と

変わらないということである。これが一概に好ましいこととか悪いことというわけではないが、何故このような結果が得られるのかについては検討しておく必要がある。

入試成績の相関係数の中で、特に目を引くのは小論文や面接との相関係数で、ほとんど無相関というべき値である。このことは小論文や面接が、学力試験などでは測り得ない他の特性を測っているというたてまえからするとただちに不都合なこととは言えない。しかし、これをよしとするには、小論文や面接の測定上の精度（いわゆる信頼性）が保証されなければならない。これを示す積極的な資料は報告中に見当たらない。他の研究から想像すると、かなり信頼性は低いことが予想される。また、小論文ではテーマの固有性などから妥当性の保証も乏しい。小論文・面接を利用している大学での今後の分析研究が待たれる。

複数の入試成績の相互関係に関連しては、このほか総合成績がどのような学力を反映するものであるかについての分析・議論がなされている。

入試成績と他の変数との関係の分析としては、調査書、入学後の学業成績、卒業論文成績などがとりあげられている。入学後の学業成績や卒

業論文成績などとの相関関係は、概して非常に低い。これは、入試選抜によって学力の層化が進むため、あるいは、入学後の学業成績に影響を与える諸要因の効果、さらに、予測変数（入試成績）と基準変数（学内での学業成績等）の信頼性の低さ、あるいは両変数の内容の違いなどにもよるであろう。しかし、この相関係数が高いことが望ましいのか、あるいは高くても低くてもよいのか。この種の分析は、単に基礎資料であること以外に、その意図が明らかでないことが多い。

報告の中には、共通第1次学力試験と第2次試験の受験者における相関がほとんどないという例がある。合格者の場合は直接的な選抜効果によって相関が低くなることが珍しくないが、受験者群で相関がほとんど0というのは比較的珍しい。この大学の場合、受験すべき大学の決定の段階で、既に学力の層化が間接的に行われるためであろう。このような場合には共通第1次学力試験に実質的にはほとんど役に立っていないことになる。国立大学進学希望者全体の学力分布全体にわたって識別力を持たせようとする共通第1次学力試験の限界を示しているものと言える。